



▲神輿の飾り付け。年長者が若者に教えながら華やかな姿へと作り上げていく

特集

無形民俗
文化財

山笠を継ぐ

東黒山で古くから行われている祇園山笠は、町の無形民俗文化財に指定されています。今回は、世帯の少ない小さな集落で刻んできた歴史をたどりながら、山笠の継承を考えます。
問い合わせ 生涯学習課

夏の風物詩
「東黒山の祇園山笠」

7月15日、東黒山区で祇園山笠が行われました。この山笠は、五穀豊穡と無病息災を願う区の恒例行事。男性たちは神輿を担ぎ、午後7時30分から約2時間かけて区内を練り歩きました。また、女性や子ども、お年寄りなどは家の前で神輿を出迎え、担ぎ手に声を掛けたり、飲み物や食べ物を振る舞ったりして地域全体で山笠を盛り上げました。

始まりは江戸時代

山笠の始まりは、江戸時代にまでさかのぼるといわれています。当時疫病が流行し、なかなか治まらないため、村人が「流行病で、たとえ家が3軒になっても神輿を担ぎ、祭りを絶やさないと願をかけたところ、疫病が見事に治まった」との言い伝えがあります。それ以降、東黒山区では一度も絶やさず山笠を続けています。かつては7月14日に行われていましたが、時代の流れとともに変化し、現在は7月14日に最も近い日曜日に行われています。また、平成6年10月に町の無形民俗文化財に指定され、町内に二つしかない無形民俗文化財の一つとして大切に守り続けられています。



地域が「一つ」に
なるとき——。



①山林でフジカズラを調達②竹の飾りを作るため竹割り器で竹を裁断③台締めは昔ながらの締め方ですすべて手作業④神輿の飾りは山笠終了後のやま解き後、区内の世帯や企業に配られ1年間の無事を祈って玄関などに飾られる⑤神輿を囲う杉壁作り⑥世間話を楽しみながらの飾り作り⑦大きな神輿にみんな夢中⑧神輿が完成したら無事を祈っておほらいを受ける⑨巖嶋神社入口に掲げられた正道旗

先人たちの魂を受け継いで

江戸時代からこれほど長く続けることは、決して簡単なことではありません。なぜ、東黒山区では長い間、山笠が守られているのか。そこには先人たちの強い思いと受け継がなければならない魂があるのです。古くからの区民に話を聞くと「昔、大先輩から『東黒山では、日露戦争以降誰一人戦死していません。これは山笠のおかげだから、担ぎ手がいなくなっても、柱一本だけでも担いで回ってほしい』と言われました。その思いに応えるためにも、受け継いでいかなければならないと思っています」と昔を振り返りながら教えてくれました。

神輿は地元の人たちの
手で作られている

約1トンにもなる神輿は、毎年区内の人たちが丁寧に作り上げています。神輿の種類は飾りのない台山、世帯ごとの旗をつける旗山、花飾りをつける花山の3種類。近年は最も優美な花山が作られています。

製作が始まるのは山笠当日の1週間前。男性たちは、かき棒と土台を締めるためのフジカズラの調達や飾りで使用する竹の準備、神輿の飾り付けなどをすべて手作業で行います。また、神輿を彩る花飾りは女性たちを中心に行っています。

親から子、そして孫へと受け継ぐ魂

伝統の継承は「同行」のつながりから

山笠が次の世代へと確実に受け継がれている背景には、昔ながらの習慣があります。それは「同行」です。東黒山区では、同年代の男性たちが伊勢神宮にお参りに行き、「同行」という集まりをつくる習慣が古くから続いています。現存する同行は、年齢層の高い順に「黒山会」「若松会」「若鷹会」の3種類。



▲昭和25年の東黒山区青年会。現在の同行「黒山会」の先輩や父の世代

年々減り続ける担ぎ手

それぞれの同行は、毎月1回集まり親睦を深めていて、そこで育まれる兄弟のような結束が、この山笠の継承につながっているのです。

東黒山区では、伝統を守り続けたいという思いとは裏腹に、人手不足という大きな課題を抱えています。かつては区内にも若者が多くいて、山笠を行っている近隣の区とも互いに協力し合いながら担ぎ手を確保していましたが、現在は高齢化や若者の流出で担ぎ手が少なくなっています。さらに今年も広報おかがきで担ぎ手を募集しましたが、自ら参加する人はほとんどいない状況です。

自ら参加する人はほとんどいない状況です。

1年で唯一みんなが集うこの行事を守りたい

山笠は私にとって、単なる区の行事ではなく、祖父や父も若いころから担いできたんだ、という歴史を知る家族の大切な行事になっています。私は小学3年生ごろから、子ども神輿や太鼓の叩き手として参加し始め、高校生のころからは、区の大人たちに教わりながら神輿作りも始めました。

山笠は、唯一地区の全世代が集まる催しです。この大切な居場所をこれからも守っていきたいです。また、人手不足が問題となっている中、持ちやすくしたり、軽くしたりすることもできますが、守り続けてきた今の形や作り方を変えることなく、子どもや孫の世代にのこしていきたいです。



東黒山区
高崎善博さん

一人でも多くの人に応援に来てほしい

東黒山区は、世帯数が37軒ととても少ない区です。昔は子どもが多く、子ども神輿もしていましたが、現在は小学生が3人と非常に少ないため、子ども神輿ができない状況です。また、区だけで山笠を続けることが難しくなっているので、数年前から役場の職員などにも手伝ってもらっています。

人手不足の状況はなかなか変わりませんが、区以外の人たちにも興味を持ってもらい、応援に来てもらえるとうれしいです。

ここまで続いてきた山笠を途絶えさせないために、今後のあり方を区のみならず考えながら、伝統をずっと守り続けていきたいと思っています。



東黒山区
区長 田中正人さん



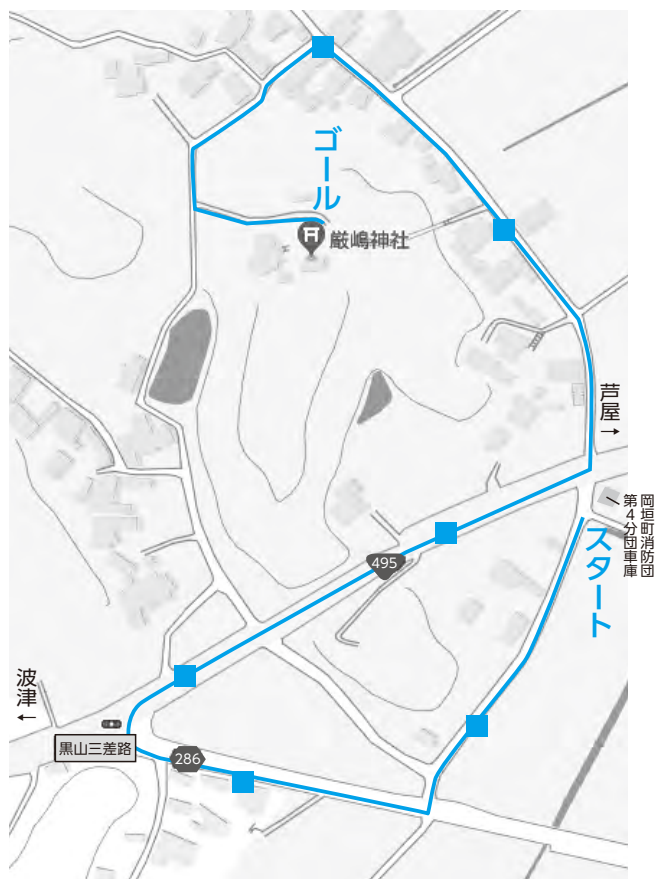
来年は同じ場所で 同じ空気を

これから先も
伝統を引き継いでいくために

祭りなどの無形民俗文化財は、仏像や建物などの形あるものと違い、守り続けていくことがとても困難です。担ぎ手不足という課題を解消し、山笠をさらに後世へと引き継いでいくためには、地域の枠を越えた力が必要です。担ぎ手がいなければ、山笠を続けていく

ことはできません。地元の東黒山区だけでなく、町全体で協力して無形民俗文化財を守っていく必要があります。

これまで山笠を知らなかった人は、ぜひ来年参加してください。また、担げなくても、地元の人たちと一緒に練り歩き、この町に住むみんなで山笠を次の世代、またその次の世代へとつないでいきましよう。



楽しむポイント

- ①神輿を担ぐ人はタオル必須! 肩への負担を軽くしよう。
- ②担がない人も一緒に練り歩いて盛り上がりよう。
- ③地元の人と交流しよう。昔の話を聞けるかも!?

休憩場所

地域の人たちが、飲み物やスイカなどを準備して担ぎ手をもてなします。

祖父が生きていたころ、山笠がある限り担ぎ手をもてなしたいといつも話していたので、今は私たち孫の世代でその思いを受け継いでいます。暑い中重たい神輿を担いでいる男性と一緒に練り歩いている子ども、地域の皆さんが喜んでくれるので、私たちにとっても毎年の楽しみになっています。

小野悦子さん
柴戸かおりさん(右)
涼佑さん(左)

